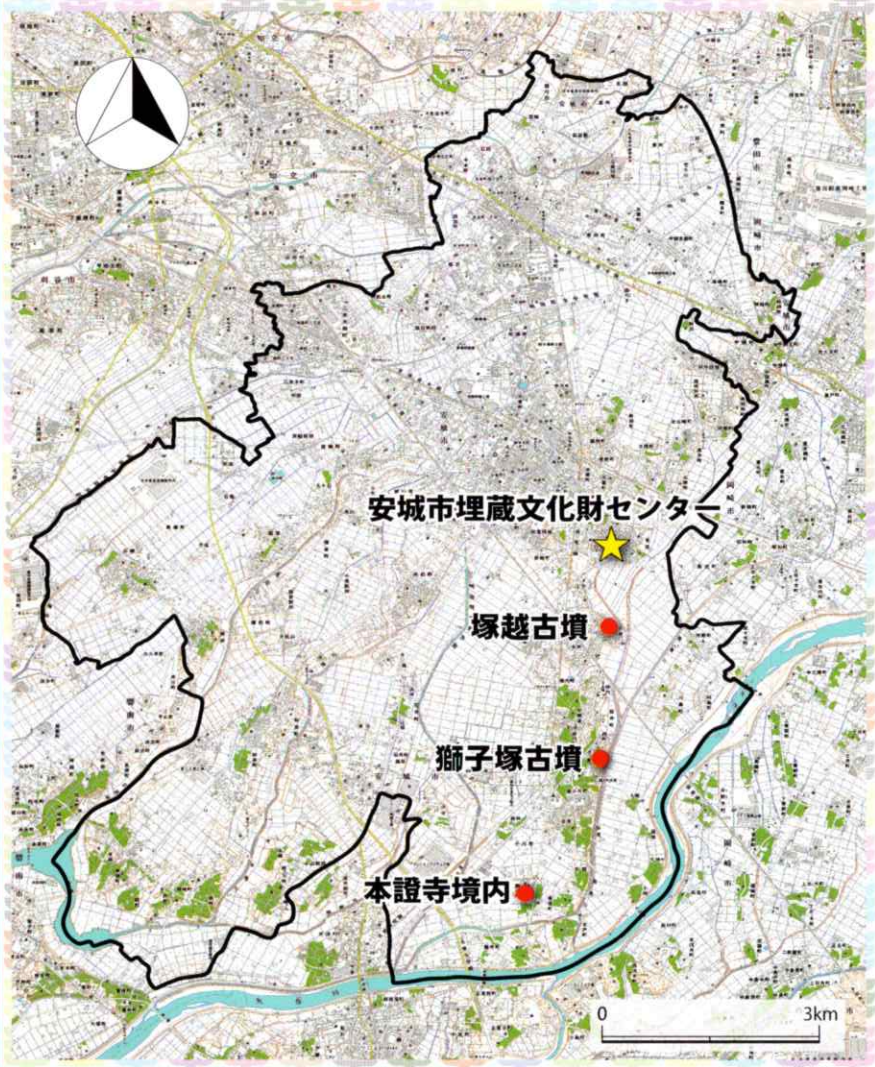
安城市には、現在確認されているだけでも 250 ヵ所以上の遺跡が残されていることをご存知でしょうか？

遺跡は、先人たちが辿ってきた郷土の歴史を知る上で欠かせない、大変貴重な財産です。後世に残していくことが最も望ましいですが、住宅建設や道路整備など、私たちの生活の中で、やむを得ず壊されてしまうことも少なくありません。

そこで安城市では、開発行為などによって遺跡が壊されてしまう前に、文化財保護法に基づき先人たちが残したものを図面や写真で記録・保存するための「発掘調査」を行っています。

令和６年度は、試掘・確認調査 28 件を行いました。これらは、安城市の歴史を紐解く貴重な手掛かりとなります。調査を通して、私たちの先人の足跡を知って頂ければ幸いです。



文化財を守り、伝える

安城市埋蔵文化財センター
〒446-0026 安城市安城町城堀 30 番地
TEL 0566-77-4477 FAX 0566-77-6600

令和６年度

市内遺跡 発掘調査 報告展

本證寺境内
塚越古墳
獅子塚古墳

Anjo City Archaeological Research Center

安城市埋蔵文化財センター

本證寺境内

ほんしょうじけいだい

野寺町

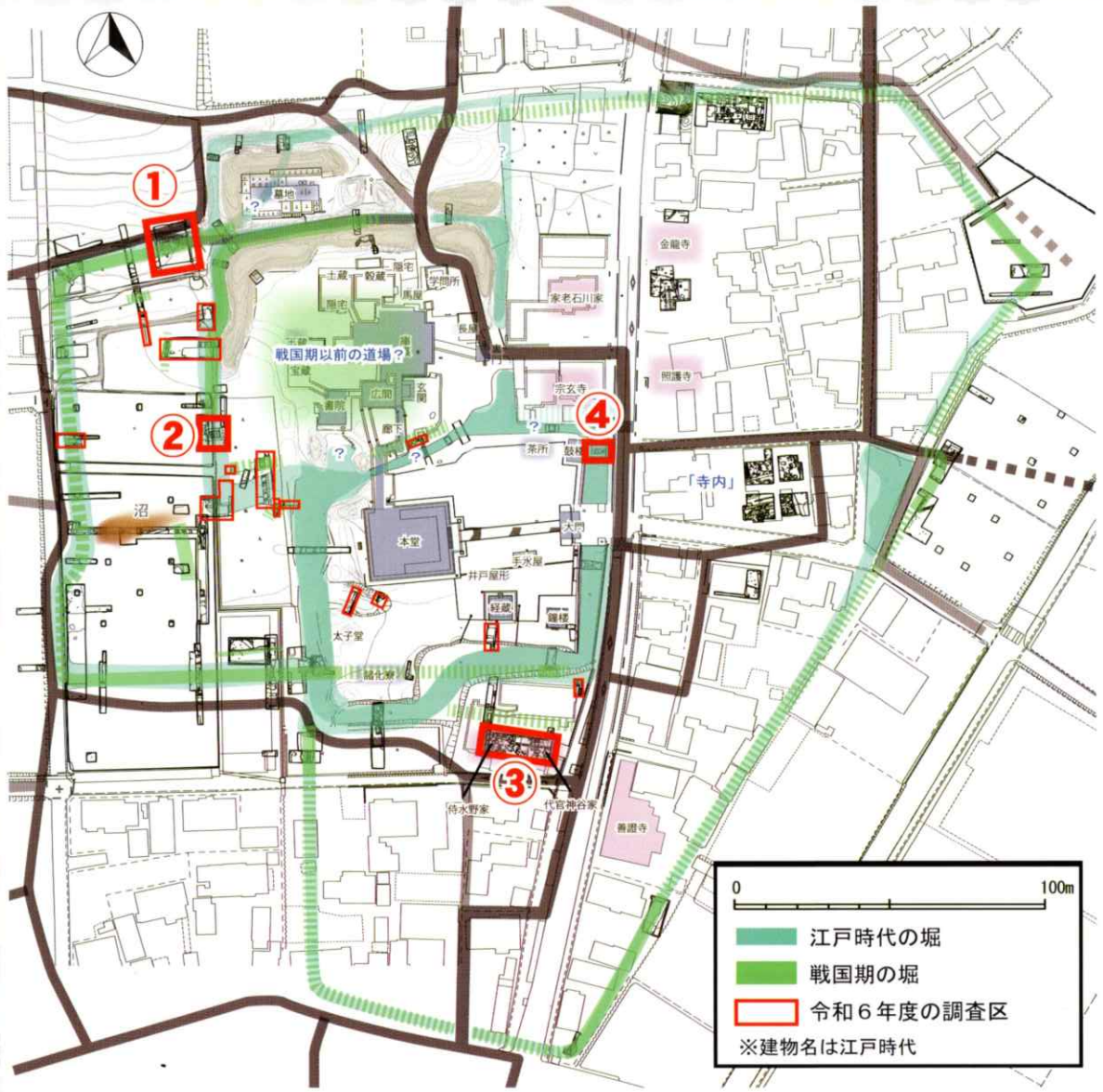
調査期間：令和６年７月 25 日～令和７年３月 25 日

本證寺は、鎌倉時代に開かれたとされる真宗寺院の名刹です。建造物は江戸時代の姿をとどめ真宗中本山としての格を保ち、地下に眠る中世以来の堀などの遺構は三河一向一揆を彷彿させます。「本證寺境内」として国史跡に指定されています。

本證寺境内では、史跡整備に向けて発掘調査を継続的に実施しています。今回は、戦国期と江戸時代の内堀・外堀の姿を明らかにすることを主な目的として調査を実施しました。

これまでの本證寺境内の調査

平成 11 年（1999）以降、断続的に発掘調査を実施しています。令和６年（2024）までに、開発に伴う調査、史跡整備に伴う調査等合わせて 24 次の調査を実施しています。主に、本證寺を特徴づける遺構である内堀・外堀・土塁の調査です。それにより、内堀・外堀は、戦国期と江戸時代の２時期に存在しましたが、その姿は時代により異なっていたことがわかってきました。土塁については、今のところ戦国期に存在した明確な証拠はみつかっていません。しかし、堀の埋土観察等から、戦国期には土塁（またはそれに類する盛土）があったことが想定されています。



▲ 調査区位置、堀推定図

戦国期

戦国期の本證寺は、江戸時代とは全く異なる姿だったことが発掘調査でわかりつつあります。特に重要な遺構である堀は、急傾斜で底がせまく、防御を意図したと考えられる規模です。

▲ 外堀（□①、西から撮影）
外堀は幅5～6m、深さ 2.8m。奥に内堀と土塁が見えます。
下層：戦国期、中層：江戸時代後期、上層：明治時代に埋まったと考えられます。

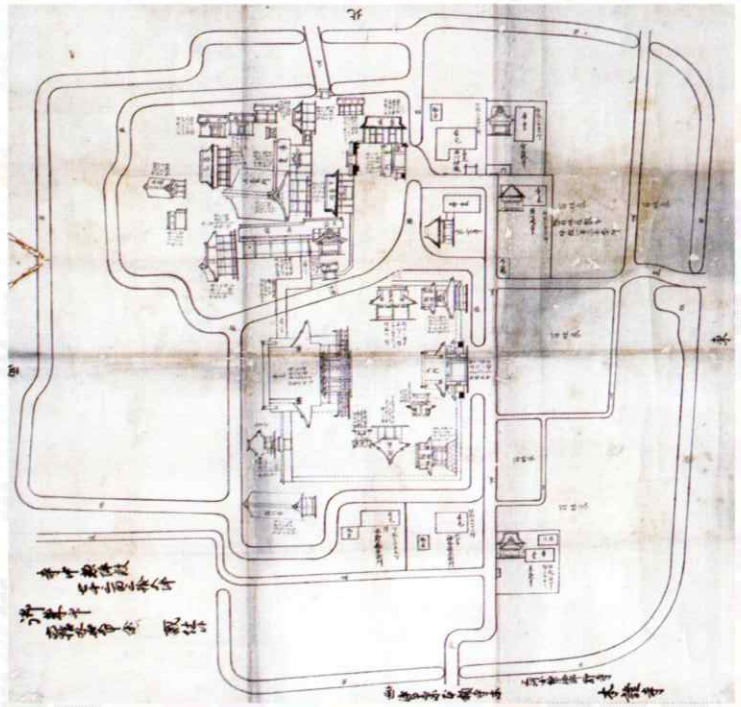
▲ 内堀（□②、南西から撮影）
内堀は幅約 5.8m、深さ 2.4m。
底から戦国期の鍋が大量に出土したことから（右写真）、西側の内堀は戦国期には存在したことが明らかになりました。

▲ 内堀出土遺物
戦国期の鍋。外面が煤けています。囲炉裏などに吊して使用したものです。

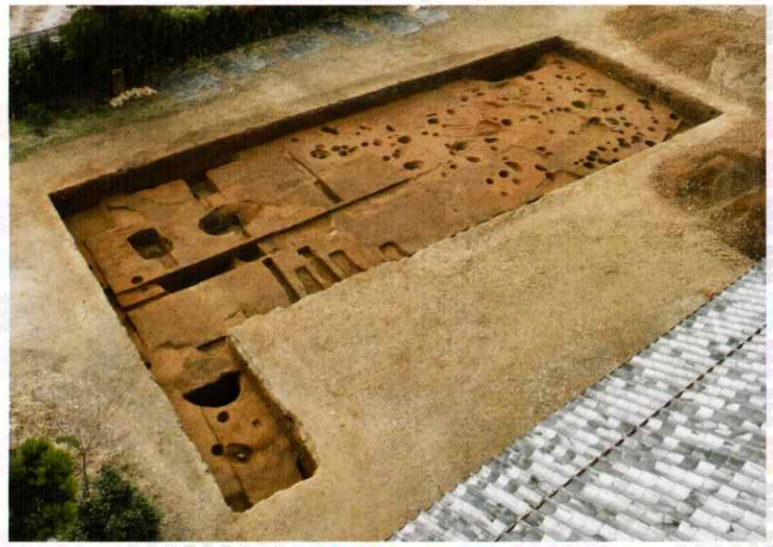
本證寺境内

江戸時代

江戸時代の本證寺は、寛政年間（1789～1801）に描かれた「本證寺伽藍絵図」でおおよその姿を推測することができます。本堂・鼓楼・鐘楼・経蔵・裏門は、この伽藍絵図に描かれている建物です。内堀・外堀も、一部をのぞいてほとんど絵図のとおりに確認できています。

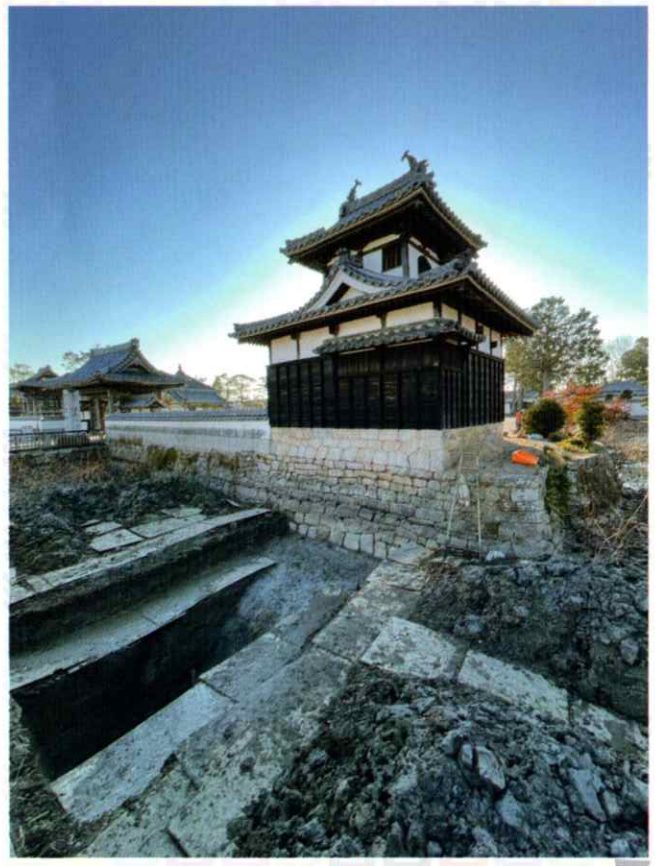


▲ 本證寺伽藍絵図
境内の建物や寺内町の構成、内堀、外堀などが記されています。この絵図と地籍図などを基に、堀の位置を推定しています。



▲ 代官・侍屋敷跡（□③、北東から撮影）
調査区東側に、代官屋敷跡とみられる痕跡が確認できました。侍屋敷跡は明確にはわかりませんでした。これらの遺構の下に、戦国期の遺構（井戸や柱穴等）があることもわかりました。

▲ 江戸時代の出土遺物



▲▶ 鼓楼前の内堀（□④、北から撮影）
深さ約２m、幅は５m以上で、東側の肩は道路の下にあります。底から江戸時代の瓦片が出土しています。今回の調査とこれまでの調査成果を踏まえ、現在見えている境内を囲む内堀は、江戸時代に境内を整備した際に掘られた可能性が高まりました。

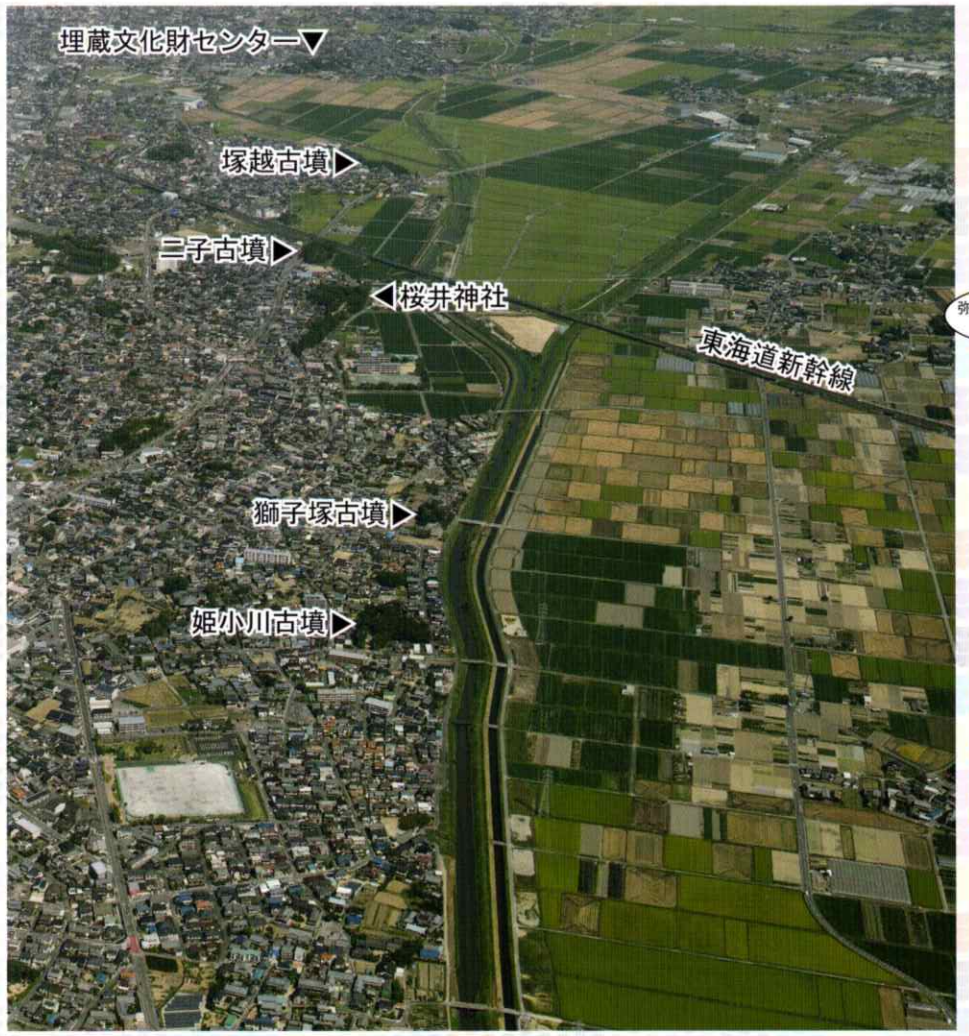
本證寺境内

桜井古墳群

さくらいこふんぐん

桜井古墳群は、古墳時代前期に造られた古墳群です。古井町から小川町にかけ、大小約 20 基の古墳が点在しています。中でも二子古墳（前方後方墳、全長 68m）、姫小川古墳（前方後円墳、全長 65m）は当時の西三河において最大級の大きさを誇り、いずれも鹿乗川流域のムラを治めた首長が葬られていると考えられます。

▲ 二子古墳（南東から撮影）



▲ 桜井古墳群（南上空から撮影）

▲ 桜井古墳群 分布図

▲ 姫小川古墳（南から撮影）

令和６年度、塚越古墳（古井町）と獅子塚古墳（東町）で、将来の保存を見据え、墳丘形態や規模などの基礎情報を得るための学術調査を行いました。

塚越古墳

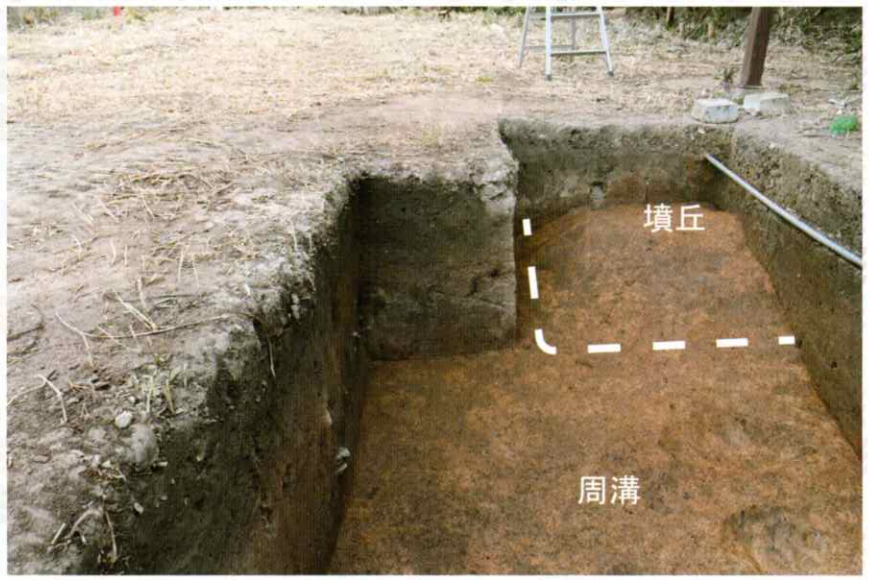
つかごしこふん

古井町

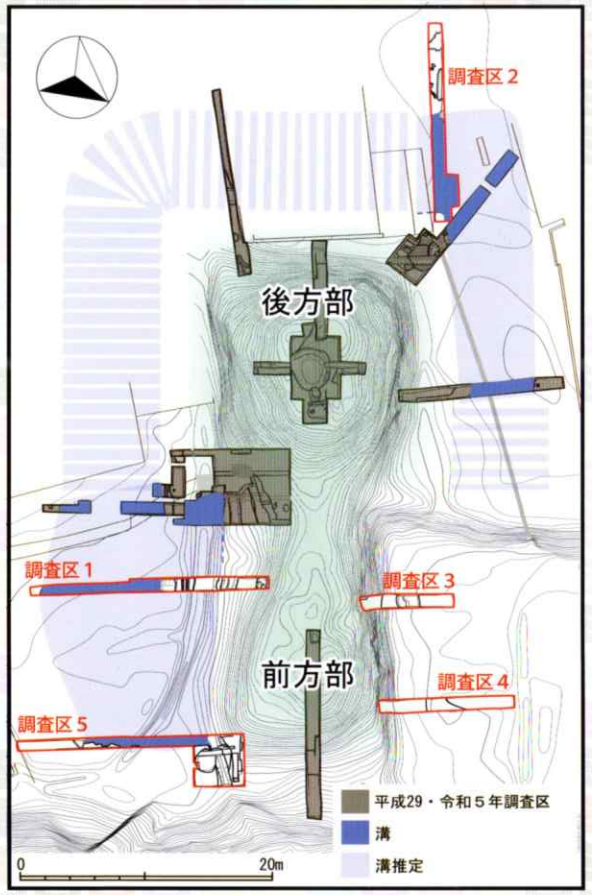
調査期間：令和６年 11 月 25 日～令和７年３月 21 日

塚越古墳は、碧海台地端部に造られた古墳で、そばには願力寺が建っています。昭和 24 年（1949）に地元有志により発掘された際、副葬品として紡錘車形石製品や鉄製品が発見されました。また、平成 29 年度・令和５年度に行った発掘調査では、古墳の大きさが 45m と判明したほか、出土した円筒埴輪から４世紀後半に築造されたことがわかりました。幅約６mの周溝も確認し、前方後方墳である可能性が高いことがわかりました。

今回の調査は、古墳の形を確定させるために実施しました。その結果、調査区２で周溝がほぼ直角に曲がることがわかり、前方後方墳である可能性がさらに高まりました。



▲ 調査区２　後方部の裾（南西から撮影）



▲ 調査区位置図

▲ 調査区５　前方部の裾（南西から撮影）

▲ 溝から出土した埴輪（調査区２）

獅子塚古墳

ししづかこふん

東町

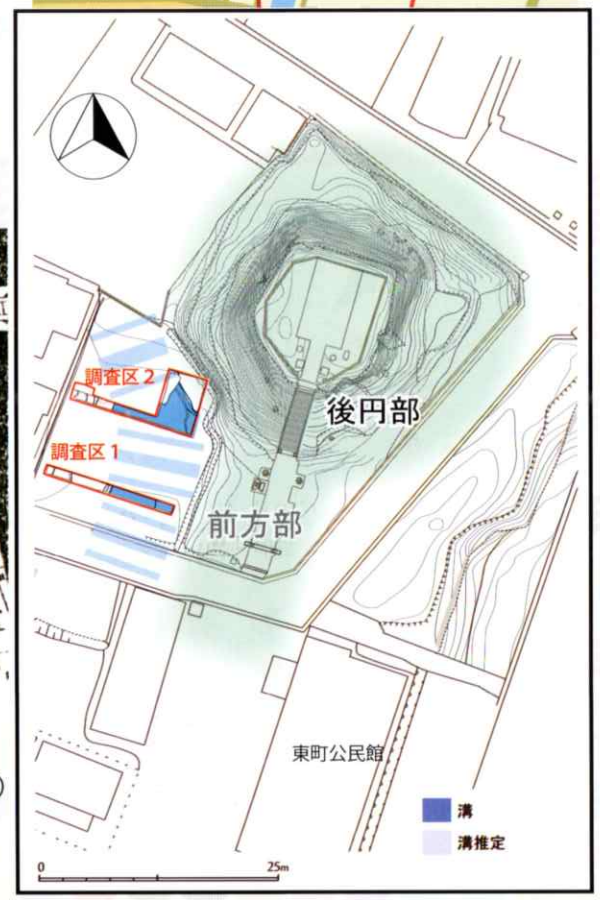
調査期間：令和７年２月４日～３月 28 日

獅子塚古墳は、鹿乗川右岸の碧海台地端部に造られた古墳です。現状では円墳のように見えますが、もとは前方後円墳または前方後方墳だったと考えられています。現存する後円（方）部の大きさは東西 26m、南北 28m、高さ約 5mで、その上に秋葉神社が鎮座しています。古墳の全長は、昭和 10 年（1935）の地籍図から復元して 40m 以上と推定できます。

平成 22 年（2010）、古墳周囲の下水道工事に伴う立会調査の際、前方部があったと考えられる部分の西側で、古墳の周溝と考えられる溝を確認しました。溝の中から出土した壺形埴輪の破片から、獅子塚古墳は４世紀後半から５世紀初頭に造られたと考えられます。

▲ 調査地全景（南から撮影）

▲ 地籍図
（『櫻井村土地寶典』昭和 10 年）



▲ 調査区位置図

今回、獅子塚古墳で初めて発掘調査を実施しました。その結果、周溝を確認することができました。周溝は上部が削平されていますが、幅８m以上、深さ 0.6m以上と推定できます。周溝からは、多くの埴輪片が出土しました。また、くびれ部付近の周溝が円形にカーブしていることから、前方後円墳だったと考えられます。

▲ 調査区くびれ部付近（北西から撮影）

▲ 出土した埴輪

ハケ目がうっすら残っています。埴輪を作った時に、道具をつかって表面を整えた痕跡です。

塚越古墳　獅子塚古墳